

図版解説

関根正二筆「死を思ふ日」

陰里鉄郎

一九七九(昭和五四)年、画家の生誕地である福島県白河市において関根正二展が開催された。この展覧会は、同市の歴史民俗資料館の開館記念展であったと同時に関根正二の生誕八〇年、没後六〇年を記念する展覧会ともなり、ごく少数のものを除いて現在所在の知られている関根の作品、五十七点が展示された(油彩画十二、日本画二、素描四十三)。

ここに紹介する二点の油彩画は(図版Ⅰ、図版Ⅱ。以下、前者を作品A、後者を作品Bとする)、この展覧会の会期中に東京・世田谷の一老婦人から提示されたもので、関根正二の製作になる作品と断定してよいものであった。発見された当初は二点とも保存状態が悪かったため、絵具の剝落、黴、汚れなど、画面はきわめて不良な状態にあったが、その後、洗浄、修復¹されて現状にいたっている。

まず、関根正二の生涯とその作品についての概略を述べておこう。関根正二は、一八九九(明治三二)年四月三日、福島県西白河郡大沼村大字大字堀目^{おおぞめ}二一番(現在、白河市)に関根政吉(一八六七―一九〇五)、同スイ(一八七一―一九三四)の第四子、九人兄弟姉妹の次男として生まれ、一九一九(大正八)年六月一六日、東京市深川区東町四六番地(現在、江東区)において死去している。満二〇歳二ヶ月余の生涯である。

関根の一家は、正二だけを残して一九〇七(明治四〇)年上京、正二も翌一九〇八年九月に上京して家族とともに前記の深川区東町の棟割長屋に住むことになり、白河尋常高等小学校から深川区立東川小学校へ転校した。父政吉は屋根葺きの職人であり、兄弥吉(一八九一年生れ)はのち石工を職業としている。関根の友人たちの回想のなかで関根家の家業に関してしばしばトタン屋、屋根屋、石屋と述べられてい

るのはそのためである。東川小学校時代に、小学校は異なっていたが、隣町の猿江町に住んでいた伊東深水(本名、一^{はな}。一八九八―一九七二)と遊び友達となった。この深水と関根との交友は相互の芸術世界における質的な交渉はほとんどみられないが、関根の短かい生涯のなかで深水は重要な役割を担うことになった。ここに紹介する二点の作品もまた深水とふかいかわりをもっている。

関根は、一九一二(明治四五)年三月、小学校を卒業、錦城中学校夜間部に入學し、東京印刷会社図案部に勤めることとなった。これは深水の仲介によったもので、深水は家庭の事情からすでに一九〇八(明治四二)年小学校四年生の頃から東京印刷会社活版部の職工となり、一九一一年同社の図案部に移り、同年十二月に錦木清方に入門、師の推めで錦城中学校夜間部に入學、そこで関根と再会、関根が深水に自分の家庭の事情を説明しまた自分も絵をやりたいと相談したことから深水が斡旋したものであった。当時、東京印刷会社図案部は、顧問として日本画家の結城素明がおり、部員には東京美術学校西洋画科出身の松野清(明治四一年卒)、同日本画科出身の西村青帰(本名喜三郎、明治三九年卒)、それに蔵前工業専門学校の卒業生二、三名がいたということである。³ 関根はここで給仕として働きながら、深水の奨めで日本画を描きはじめ、翌一九一三(大正二)年三月の第一三回巽画会展に《女の児》を出品入選した。このときの巽画会展では深水の作品《無花果の蔭》が褒状一等をうけている。関根のこの時の出品作品に関しては現在のところ題名以外のことは全く判っていない。

日本画を描きはじめていた関根が洋画へ転向していった動機と経緯については、深水と、やはり同じ職場にいた吉川晴帆の回想文のなかに触れられている。⁴ それらによると、小林専という洋画を描いていた画家が同じ図案部に在職していて、関根はその感化を非常につよくうけたということである。深水によれば、小林専は「大変なロマンチスト」「天才肌の洋画家―非常な読書家で、論客でニイチェやオスカー・ワイルドの信者であった、殊にワイルドのデカタン^{decatan}のなとこに共鳴していた」といい、吉川晴帆によれば「小林君は穩健ながら社会主義的色彩を帯びてた人であった」ということである。このほかには洋画家小林専に関して何ひとつ分っていない。そうして小林の「社会主義的色彩」とはどういう性質のものであったかも明瞭

ではないが、この時期は社会主義運動にとっては大逆事件（一九二〇年五月）以後の暗黒時代であって、大杉栄、荒畑寒村によって一九二二（大正元）年二月の雑誌『近代思想』の創刊によってようやく転換が示されようとしていた時であり、小林も『近代思想』影響の波紋のなかにいた」と推察されている。⁵ ワイルドに即していえば山本銅山によるワイルドの「社会主義下における人間の精神」（一九二一年二月）の抄訳が『近代思想』一卷五号に掲載されており、和気律次郎著『オスカ・ワイルド』の刊行が一九二二年一月（春陽堂）であり、翌一三年二月には戯曲『サロメ』が上演されている（島村抱月訳、松井須磨子、沢田正二郎主演、帝劇）。今東光のつたえるところによると関根はなかなかの読書家であったというが一四歳であったこの頃の関根は読書によってよりも、小林の談論によってこれらに感化されたものと思われる。東京印刷所時代の関根に関して吉川晴暉はまた「机を並べてる伊藤君がいつも才筆を揮て浮世絵風の綺麗なものを描くに対して、同君はイツモイツモバタ臭い後期印象派風とでもいう様のものを描くという風で、常に面白い対照をして居った⁷」と書いている。それがどの程度後期印象派であったかは判然としないが、いづれにしても関根は、思想的には小林を通して世紀末的なモダニズムの影響を感受し、絵画的にはこの時期のフュザン会に代表される後期印象派の余波のなかにいたと推測される。

「ワイルドのデカダンの気分」に染った関根は、深川畏限で不良少年視されたが、本格的に洋画へむかい、岡田三郎助が指導していた本郷洋画研究所へ一時期通っている。またその後には太平洋洋画研究所へも通った時期があるが、正確に何時であったかは分明的ではない。そして小林専の友人で日本画家野村某の誘いで無銭旅行の途についている。野村との無銭旅行の行程についても正確には分っていないが、甲斐、信濃、越中、越後を遍歴したといわれ、その時期は一九一三（大正二）年五月から同年九月にわたる約五ヶ月ほどであったと推定される。この旅行中、関根は長野市内で偶然、河野通勢（一八九五—一九五〇）を知り、河野のペン・デッサンと河野が所有していたヨーロッパ・ルネッサンスの画家たちの画集を見たことが、関根のデッサンに大きな影響を与えることとなった。土方定一氏の調査によれば、関根が河野宅で見たものは「The Popular Library of Art: Albrecht Dürer, London, 1902」とい

った小冊子（文庫本大）で、デュラーのほか、レオナルド・ダ・ヴィンチ、レンブラントなどであったかも知れない。⁸ 「其河野氏のペン画は余程同君のペン画の上に大に参考になったものと見えて其後の同君のペン画がカナリ違て来た様に噂したものでした」（吉川晴暉）というように、関根は河野のデッサンを通してルネッサンス期のデッサンの影響を受けたのであった。一九一四（大正三）年一〇月、関根は巽画会第一四回展にペン・デッサン〈木場〉二点を出品している。この回に巽画会は洋画部を新設し、藤島武二、梅原竜三郎、岸田劉生などが審査に当たっている。この作品も現在残されてなく、また図版さえ知られていない。「白と黒とで絵は描ける。此んな事を豪語しながら一日に四五枚も描いてミケランジェロを崇拜し、ダビンチを渴仰し、或はデュラーを、或はレンブランを写真版の模写までした時代⁹」といわれているのは多分この時期であろう。

一九一五（大正四）年九月、関根は初めて油彩画〈死を思ふ日〉を二科会第二回展に出品、入選し、以後、死の年まで毎年二科会展に出品している。その間、関根は最初に出品した二科会展の会場で安井曾太郎の滞欧作品に接して色彩について大きな影響をうけ、また同じ年の初夏の頃から詩誌『炎』の同人に参加している。文学者との交遊は『炎』の同人、前田夕暮門下の村岡黒影（本名弘市、山形県出身）から、さらに伊東深水を通して知己となった素木しづ（画家上野山清貢夫人）、同じく深水を通して久米正雄を知ることになった。久米正雄が村岡黒影の話からテーマをえたという最上川中流のツツガムシ病とその研究者に取材して発表した小説『螢草』（一九一八年三月—九月、時事新報連載）の挿絵を深水が担当していたのである。関根は、こうしたことから一九一八年五月、有楽座で上演された生田長江作、久米正雄舞台監督『円光』の舞台の背景に使用された油彩画〈婦人像〉を描き、同時に上演された久米正雄作、山本有三演出『地藏経由来』に今東光、東郷青児、佐々木茂索らと百姓大勢の一人として出演した。この有楽座に関係した前後に関根は久米正雄の紹介で持病であった蓄膿症を帝大病院で手術したが、その予後がすぐれず、また失恋も重なって強度の神経衰弱となったといわれ、発狂した、との風説が友人たちの間に流れている。今日、関根が精神医学の対象となっているのはこの時期の言動のためであり、この時期の関根の狂的な言動をつたえる挿話は、事実、十分に精神医学の対象

たりうるものであろう。¹⁰ この病後に、関根は代表作『信仰の悲しみ』、『姉弟』(挿図2)を製作して一九一八年の第五回二科会展に発表し、さらに翌年にかけて『自画像』、『三星』(挿図1)、『子供』、『慰められつつ悩む』など、関根芸術の頂点をなす作品を生みだしているが、肺結核の発病と流行性感冒が加わって身体は衰弱し、一九一九(大正八)年六月一六日午前一時三〇分、アトリエに使用していた長屋の二畳の部屋で死去している。

さて、作品Aについてみていくと、画面右下に「1915」[Shoji Sekine]と二段に分けていささか稚拙な筆致で油絵具によるサインが描きこまれている。画面には、羊歯のような雑草におおわれた土手の上に四本の樹があり、樹と叢とは風をうけて揺れ動いているかのように描写されている。画面中央から右寄りのところの樹と樹の間に、顔を伏せるようにして歩いている一人の人物が描かれている。筆致は、全体としては決して暢達したものではないが、叢のざわめきが聴取されるようなある種のリズムをもっている。色彩は緑と褐色だけといってもよく、ほとんど単一の色調である。

以上のようなこの作品Aは、前記の、一九一五年第二回二科会展出品の『死を思ふ日』と推定される。この『死を思ふ日』に関しては、現在までいかなる図版類、写真資料も発見されていない。第二回展当時は二科会の展覧会図録も刊行されておらず、また稿者がこれまで調査した範囲の限りでは雑誌等の二科会展評の図版にも掲載した例はなく、批評文においてもこの作品に言及したものは見あたらない。さらに、関根の没後三ヶ月目に開催されている遺作展¹¹にもこの作品の出品はない。『死を思ふ日』という作品名、あるいはその製作前後の関根に関する言及は、逝去直後と遺作展開催に際して友人諸家の回想文¹²のなかにおいてであるが、そのなかでも画面の図様について語られたものは皆無であった。戦後、関根が大正期の洋画の異才としてしばしば回顧の対象となったとき、唯一つ、伊東深水による次のような記述がある。

そのとき、二科会の第四回¹³に出品したのが「死を思ふ日」という作品でした。彼は死のことなんか考えたことがない男なんです、デューラーに刺激されて、そういう深刻な絵を描いたのだと思います。労働者風の男が強風をうけながら大木の下を外套をかぶって歩

いているような絵でした。それを見ていると、いかにも人生の大きな悲しみにぶつかったような感じをうける、大変いい絵でした。¹³

この文章は、作品発表の時から四五年後、深水六二歳のときの証言であるが、作品Aの画面と明らかに一致する。戦争前に書かれた関根に関する諸家の追想、回想記のなかで『死を思ふ日』に触れることの最も多かったのは伊東深水であり、これらの文中で深水はこの作品が関根の無銭旅行による収獲であったことを強調している。深水にとって『死を思ふ日』は忘れ難き作品だったに違いなく、そして戦後にこの作品を再見する機会をえてこの言及にいたったものと想察される。

一九一五年に関根は一六歳で、先に引用したように「白と黒で絵は描ける」と語っていた時期であったが、現在までこの時期の油彩画として知られているものは『牛舎』(福島県教育委員会蔵)のみであった。作品Aはその色調においても、筆触においてもこの『牛舎』と共通するところが多い。

作品B(『風景(杖をひく人物のいる)』)は、サインを欠いており、さらに作品A以上に何らの資料も見出せないが、関根の作品であることは疑いないであろう。樹木の枝と樹葉の形体は関根特有の個性的な形体感と筆触のリズムを示している。この夫々の枝や樹葉の塊の踊っているような動きのある形は、不鮮明な図版であるが『夏木立』¹⁴と共通する形を示している。そして作品Bは年記をもっていないが、おそらく作品Aのあと、即ち、一九一五年以後で、関根が安井曾太郎の滞欧作品によって色彩について開眼したあとの作品と思われる。それは、さらにあとの『信仰の悲しみ』や『子供』(一九一九)などに見られる関根の象徴的な色彩となった朱と青のうち、朱はまだここにも現われてきてはいないが、青の色調が画面上半分の空の部分に現われており、この作品の製作期を暗示しているからである。

作品BのX線透過写真(図版III-a)は、この『風景(杖をひく人物のいる)』の絵具の下に、これより以前に描かれたもう一つの画面があったことを示している。それは横長の画面で、葡萄を盛った円い高坏と四個以上の桃とを描いた卓上静物の作品であったと思われる。形体の描写は厳しく、くっきりとした輪郭をもったものであったと見うけられるが、色調については判然とはしない。だが、明るい緑と朱が含まれている多彩なものと思われる。この種の静物画は現存する関根の作品には皆無

であるから、この下層の画面は関根の作ではない可能性もないではないが、常識的、一般的に考えれば関根は自身の過去の画面の上に別個の風景を描いたと考えてよいであろう。そうであるとすれば、この下層の静物画は、次のように見ることができる。

関根は安井曾太郎の滞欧作品に接し、それを通してセザンヌ風の作品を数多く描いたと伝えられている。¹⁵しかしながら、現存している作品のなかにはセザンヌ風の表現を顕著に示す作例はほとんど一点もない。そのためにそう伝えられながらもその実状を窺うことはこれまで全くできなかったのであるが、この下層の静物画こそは関根のセザンヌ風の作品の一つであったのではないかということである。関根は経済的な困窮のなかにあつて古い作品を潰してその上に新たに作画することも少くなかったに相違ないからである。

この縦長の画面の二点、作品A・作品Bは、ともに関根の他の作品と共通する構図をもっていることも指摘しておかねばならないであろう。関根の縦長の画面は、上下を等分に四分割する線上に構図上の重要な線が置かれることが多いが、作品A（死を思ふ日）においては、画面下方の叢の上辺、樹と男の立っている線は正確に四

挿図1 関根正二筆「三星」 1919年

挿図2 関根正二筆「姉弟」 1918年

分の一の線上にとられている。それは《神の祈り》（一九一八年ころ）における地平線と同様であり、《三星》（一九一九年、挿図1）においては上方の四分の一の線上に並立する三人の人物の両眼が置かれている。作品B（風景、杖をひく人物のいる）においては人物の歩いている道路が画面下方の四分の一の線上にあり、二分の一の線、即ち真中の線には僅かに傾斜した中景の丘の上辺が配されている。《姉弟》（一九一八年、挿図2）においても二分の一の線上に地平線が置かれている。

最後にこの二点の来歴について若干触れておかねばならない。この二点とともに故福原道太郎氏旧蔵のもので、福原氏はかつて東京市本所区林町に住み、昼間は勤務医として某病院に勤め夜間だけ開業していた医師であった。福原氏は伊東深水と親交し、ときに深水を援助しており、この関根作品二点も深水の依頼で購入したのであったという。その年時は不明である。

註1 発見当初の二点は、修復を担当した小谷野絵画修復研究所の調査報告書によれば、二点とも高温多湿の環境に長期間おかれていたと思われ、損傷度は作品Aが中程度、作品Bは大であった。ただ両者とも画面、木枠等はオリジナルで、過去に何らかの手が加えられた箇所は皆無であった。作品Aは、基底材Ⅱ麻布の底辺に近いところで手縫いで麻

布を継ぎたしてあり、縫い目は向って左から右へと直線になっていた。

2 生年の月日について戸籍上では四月一〇日となっているが実際には四月三日。兄弟姉妹には、兄が弥助、姉にクラ、フサ、正二のあとにキク、コト、繁、秀男、武男がいた。白河尋常高等小学校明治三十九年度、四十年各学年修業者名簿の尋常科第一学年の欄には、修業年月日、族籍統柄、氏名、生年月日は「明治四十年三月廿三日」「福島県平民・留吉弟・関根正二 明治三十二年四月三日」となっている。留吉は従兄で正二の父政吉の兄久吉の子供であった。

3 伊東深水「関根君に就て」(中央美術・大正八年七月号)同「天分豊かなる関根君の芸術」(みづゑ・一七八号、大正八年二月号)、同「関根君の追憶」(美術新論・昭和二年七月号)

4 伊東深水・前掲。吉川晴帆「関根の事」(みづゑ・一七八号、大正八年二月号)

5 土方定一「幻視の画家―関根正二」(世界・昭和四〇年四月号。土方定一著作集7・近代日本の画家論II)

6 今東光「幻視の画家関根正二補遺」(絵、昭和四六年六月号)

7 吉川晴帆・前掲

8 土方定一・前掲

9 佐々木猛「関根君」(信仰の悲み・関根正二遺作展覧会目録、大正八年九月)

10 加藤稔「関根正二と幻視」(精神医学・第一七巻第七号、昭和五〇年七月)

11 大正八(一九一九)年九月三日―九月二五日、東京神田神保町の兜屋画堂において開催された。目録が不備のため正確には判らないが、油彩画四五点、ペンデッサン二〇点、木炭画二点、水彩画三点、パステル画六点、墨画一点、計七十七点が出陳されている。

12 伊東深水・前掲。神田微光生「関根正二氏遺作展覧会」(みづゑ・一七八号、大正八年二月号投稿欄)。そのほかでは戦後の有馬生馬「関根正二のこと」(美術手帖・六九号、昭和二八年五月号)

13 伊東深水「関根正二と私」(三彩一二七号、昭和三五年六月号)

14 みづゑ一七八号、大正八年二月号、8頁に掲載されているが、大きさは八号、製作年代は一九一三年作と記されている。この作品は現存せず、製作年については疑問が残る。

15 久米正雄「関根正二君の死・陋巷に輝く芸術」(中央美術、大正八年七月号)、佐々木猛・前掲

第三四号 正誤表(江上論文)

ページ	段	行	誤	正
二二	下	一一	酷示	酷似
二三	上	一〇	貞和	貞観
二三	下	八	誅	誅
二三	上	一八	風誦	諷誦
二三	下	一	阿弥経	阿弥陀経
二五	下	一一、一六	福太郎	福一郎
〃	〃	一四	矢島	矢島
〃	〃	二四	五〇年条	五〇年、
英文1	右	一九	Sutra	Sutra
〃	右	四三	on Mt. Koya	(削除)